

## 生物学と政治学

杣, 正夫  
九州大学法学部教授

<https://doi.org/10.15017/1696>

---

出版情報 : 法政研究. 42 (2/3), pp.19-52, 1975-12-25. 九州大学法政学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 生物学と政治学

柚 正 夫

## はじめに

ウォルター・バジヨット (Walter Baghehot) は一八七二年、当時の自然科学のめざましい成果にうながされて「自然科学と政治学—自然淘汰と遺伝の原理の政治社会への適用」(Physics and Politics, or Thoughts on the Application of Principles of 'Natural Selection' and 'Inheritance' to Political Society)を書いた。自然についての証明された法則や事実の多彩な提示はまさしく争いがたいものであった。そこには人間的自然についてのものも含まれていた。主として形而上学的諸観念に導かれていた人間の社会や政治の理論体系はこれら自然科学的見解によって修正されなければならないと思われる。そこでバジヨットは政治社会の発展を人間性についての自然科学的事実によって根拠づけることを本書で試みた。もつともそれは伝統的な哲学的理論体系の枠の中に自然科学的事実を組み入れることにとどまったのであるが、ともあれ鋭利な政治評論家としてバジヨットが人間の自然についての科学的解明の衝撃を強くうけ、それに応じて作業したことはまったく正当な態度であると思う。

バジヨット以後、人間にかかわる自然科学上の発見や理論体系の整備は比較にならない程の進歩を記録した。とくに第二次大戦後の一九六〇年代にかけての二〇年はそれ以前の一〇〇年間よりまさる成果をあげた。神聖な生命の化

学的合成はいまや実験段階に入ったようである。人間の実存性についての二元論的見方—形而上学からと自然科学からとの見方の並存—は後退をつづけ、自然科学的見地への一元化に道をゆずっている。

政治学は人間社会の統治の技術と実際の学問である (Petit Robert)。政治学の理論は人間についての考察から出発しなければならぬ。プラトン、アリストテレス、ホッブス、ロック等々の政治理論史上の偉大な思想家はすべて「人間とは何であるか」の課題に大きく心をくだいた。この謎は人間にとってなお完全に解明されないものとしてありつづけるが、しかし人間についての自然科学の進歩は、人類について確実に知り得ることの量を拡げてきた。一方、社会生物学 (social biology) と名づけられる生物学の一分野の研究は、第二次大戦後急速に進み、その領野から動物の社会的機能に関するすぐれた業績が提供されてきた。そしてこれらの研究の結果、もたらされたものは、ホモ・サピエンスとその他の動物、そして生物全体についての明白な連続性<sup>(1)</sup>の確認であった。

道具と言語の発明と使用を可能にした人類の中枢機能神経系の発達が人類文化を生みだした。文化は人類の環境への適応の一形態であり、人類の生物性の従属変数であるが、同時にそれは他の動物との大きな差違を示す「超」生物的現象でもある。この二面において文化現象は解明されることを要する。

第二次大戦後急速度の開発を見た行動科学は、生物学と政治学とを方法論的に関連づけて研究する上で大きな便宜を与えた。アメリカの D・イーストンらの政治体系分析の手法がそれである。

本稿はこうした生物学と政治学の関連の中で、人間の生物性を基準にしてこの関連を考察することになっている。まず政治思想史のうちに生物的人間像が登場してきた経過を見、つぎに人間と動物との連続性の主要側面を例示的にたどり、第三に文化的側面における相違の解明に移り、最後に政治理論の出発点である人間像に対する生物学的寄与が政治学の体系に如何なる課題をもたらしたかの考察を行なうことを意図している。

(1) W. J. M. Mackenzie : Politics and Social Science 1969, p. 24, pp. 158~164.

一 生物学的人間の登場

《寓話》

アイソップ物語<sup>(1)</sup>から始めよう。ここには誰もが知っている通り人間に親しい動物が数多く登場し、物語の主役を演ずる。もっともかれらの示すものは生物学的に確かめられたものではなく、人間に日常的に認められた動物の表面的・観念的な性格と行動である。しかもこれら行動は人事の機微を託され、人びとへの教訓を含んだ寓話である。例えば、その一つ「王を求める蛙たち」はつぎのように語られる。

蛙たちは本式な支配者をもたないことを悲しみ、ジュピター神に王を与えるよう嘆願する。ジュピターは大きな丸太棒を王にするよう蛙に投げ与える。蛙たちはその落下の音の大きさにおそれて水中にかくれるが、やがてそれが生きものでないことを知って、それを馬鹿にする。そうして蛙たちは別の王にとりかえるよう求める。ジュピターはそれを聞き入れてウナギをつかわす。しかし蛙たちはその好人物ぶりが気に入らない。かれらはそこで第三の王をもとめる。ジュピターは蛙たちの不平を不快に思い、こんどはサギを送る。サギは毎日蛙を餌にくい、ついには一匹残らず平らげてしまった。

ここには大衆の偶像崇拜や権威主義、それによる犠牲が諷刺されている。アイソップ物語ではまず、人間関係が主たるテーマである。しかもそこには欲望とか支配とか力の関係するテーマ、その意味で政治的テーマが多い。つぎに登

場する動物たちはまったく「人間的」動物である。動物たちは人間的テーマを演出する役者であるのである。このこととはイソップ的機智を愛したフランス人にラ・フォンテーヌ (Jean de La Fontaine, 1621~95) が与えた「寓話」(Fables Choisies Mises en Vers, 1668) についても同様である。

この学術的論文の冒頭に子供むきの寓話の引用を許してもらったのは、一つにはこれら物語がすぐれた政治的知恵を秘めた教訓集であり、動物が親しくとりあげられていることで本論のテーマと外見上かかわっていることである。さらに二つにはこれら物語に見られる人間的生物観が意外に長く、現在に至るまで政治理論史上に散見するからである。人間的生物観とは、生物学的根拠の弱い、人間の日常的先入観にいろどられた個々の生物像をいう。マキアヴェリは伶俐と狡猾の代表として狐をあげ、ホップスは「人間は人間にとって狼である」と自然状態の人間関係の特徴づける兇暴な闘争関係を狼の性格で象徴させているが、かれらに口がきければ、このような人間の見方をかれらの本性をはなれた偏見として抗議するに違いない。むしろ人間にとって伶俐、狡猾でもっとも警戒すべきもの、兇暴・残酷な攻撃性を強くうけているものは、自然状態にまで引きもどすまでもなく、この現実の世界に生きているわれわれ人類である。人類は生物学的にいつてももちろんもろもろの美德にあわせてスケトルの大きい悪徳の持ち主であることは明らかである。近い過去の戦争がそれをやりきれないほどに充分、証明したのであった。

#### △アリストテレス▽

さて人間の本質を生物学的認識に関連づけて把握し、その本質を基礎に政治社会を論じた学者として最初にあげべきは、アリストテレスであった。かれはプラトンとともに稀代の博学であった。その政治学者としての卓越はあえていうを要しないが、生物学者としても当代の生物学の体系的な総合をなしとげた第一人者であった。

アリストテレスは「政治学」の最初から、人間は動物であること、しかも国的動物であることを明言する。<sup>(2)</sup>かれは

プラトンと異なり人間についての理想主義的観念像をとらない。かれは人間を蜜蜂などの群居動物の一員に数え、しかし「国的」であるところにその違いを見出す。そしてこの「国的」であることは、

何故なら自然は、……何ものをも無駄に作りはしないのに、動物のうちで言葉をもっているのはただ人間だけだからである。声なら、これは快・苦を示す徴しるしであるから、従って他の動物もまたもっている……しかし言葉は有利なものや有害なもの、従ってまた正しいものや不正なものをも明らかにする為に存するのである。何故ならこのことが、すなわち独り善悪正邪等々について知覚をもつということが、他の動物に比べて人間に固有なことであるからである。そして家や国を作ることの出来るのは、この善悪等々の知覚を共通に有していることによるのである。

(第一巻第二章)<sup>3)</sup>

アリストテレスは感覺的存在としての人間を重視する。人間は五感を有する感覺的存在である。この感覺的存在であることよって人間は他の動物と同列の生物的存在となる。つぎにアリストテレスは「言葉をもった動物」として人間の他の動物に対するすぐれた特性をあげる。人間は言葉によつて相互に意見を交換し、善悪等々の共通の意味の領域を発達させる。思想の形成である。この共通の思想の働きとして家や国が作られる。いいかえればこのような言葉のはたらきは人間の文化形成のはたらきであり、家や国はこの文化の産物であるわけである。第三にアリストテレスは、家・村・国は人間の生活のそれぞれの段階の必要から生じたやはり自然的存在である(第二章)とする。こうして「完全な自足の共同体」である国という文化の産物は大きくは生物学的人間の営みの一部とされる。そうして第四に「国を組織した最初の人は最大の善事の原因者」<sup>4)</sup>である、というのは完成体として人間は「動物のうちで最も善

いものであるが、しかし「法や裁判」の外にあるときには動物のうちで最悪のものとなるからである、となり、政治組織としての国家が生物学的人間の卓越を実現する媒介者とされる。無政府主義者とは反対に、アリストテレスは国家善性論者であるが、生物学的人間の生活と国家の役割を結びつけた枠構造は現代においても妥当性を失わない。

アリストテレスの生物学的人間はその政治理論体系とどんな内容的関連を示すかを簡単にスケッチしておきたい。まず生物学者としてのアリストテレスは人間を生物としてつぎのように規定する。プシュケは靈魂或いは心を意味するが、この語が生物と無生物とを区別する指標として用いられる。靈魂には植物的靈魂、動物の靈魂と理性的靈魂の三種がある。植物的靈魂はもつとも下等なもので、成長と増殖能力が与えられている。この二つは生物の特徴をなす能力である。動物のもつ動物の靈魂はこの二つの上に運動能力をもつ。人類は理性的靈魂をもち、植物、動物の能力を合わせもち、さらに加えて理性能力をもつ。理性能力は人間の運動や行動を思考によって指令する能力を意味した。人間はこのように生物学的にはその理性能力のゆえに最高の魂をもった第三の生物であったのである。もつともアリストテレスは後年、理性能力を人間と動物とを分ける絶対的基準にしなくなり、動物もその程度に応じて人間と同じ理性能力を分かちもっていることを認めた。

さて政治社会に生物学的人間が適応していくには理性能力が主な働きをする。「ところで人は三つのものによって善くて有徳な者になる。その三つとは生れつきと習慣と<sup>ことわり</sup>理とである。<sup>(5)</sup>」人間以外の動物は主に生れつきによって生きる。そのうちのいくつかのものは習慣によっても生きる。しかし人間は理によっても生きる。というのは人間は理によつて説得されると、生れつきや習慣でえたものとは違った仕方では生きることになる。習慣とことに理とは教育の仕事である。アリストテレスは人間の理性能力に絶大な信頼をおく。そしてそれを働かせる制度である教育は政治施策の中心項目となるのである。人間の本性は理と<sup>ヌーシス</sup>理知とをうることによって完成するのであるから、それが得られるよ

うに「出生と習慣の訓練とを整えなければならぬ。」そして第二に、

魂と身体とが二つであるように、魂にも二つの部分があるのを見る。すなわち理をもたぬ部分ともつ部分である。そうしてこれらの部分のもつ状態もその数が二つであつて、そのうち一つは欲情であり、他は理知である。そして身体は生成の上では魂より先きなるものであるように、理をもたぬ部分をもつ部分より先きなるものである。このことも明らかである。というのは怒りと意志、さらに欲望は生れて直ぐにでも子供に存しているが、勘考と理知とは本来年がいった時に生じてくるものだからである。それゆゑ第一に、身体に対する配慮が魂に対する配慮より先きでなければならぬ。第二に欲情の配慮が理知のそれより先きで、しかも欲情の配慮は理知のためのもの<sup>(6)</sup>であり、身体の配慮は魂のためのものであらねばならぬ。

生物学的人間はアニマル的人間と理性的人間との二つの側面をもつ。理性的人間の生の展開のためにはアニマル的人間をまず治めねばならない。身体の問題が精神の問題より先きである。健全な精神は健全な肉体に宿るといふわけである。また欲望への配慮が理知の配慮より先きであるが、アリストテレスは人間の欲望がこのように順を追つて制御されるものと考えていたようである。ホッブスが人間の欲望が自然状態で無限に拡がるという悲劇的な見方をしたのに対し、アリストテレスは人間性とその理性についてより樂觀的であつたのである。優生学的考慮も政治家の仕事としてあげられている<sup>(7)</sup>。結婚が考慮される。よい子供を作るための結婚適令は男性が三七歳ごろ、女性は一八歳ごろとされ、盛年期を過ぎたら公のために子供を生むことをやめねばならない。

教育では、それは自然のし残したことを補充するのが目的と位置づけられる<sup>(8)</sup>。そして理よりさきに習慣によつて、



精神よりさきに身体についての訓練がなされねばならない。教育科目のうちでは音楽は特別に重視される。それは他の知覚にまさって魂の性格をかえていく力を持つからである。<sup>(9)</sup>

### △トマス・アキィナス▽

アリストテレスがはじめた生物学的人間を基点として政治体系を構成する科学的な政治学研究はギリシア都市国家の崩壊とともに地下に潜む底流となる。中世のローマ帝国がキリスト教を国教にした時期からキリスト教の教会と聖書の権威が科学的真実の上に君臨しはじめた。政治理論もこの権威的思考の下にあった。生物学的人間に代わって神の被造物としての人間がもち出され、政治理論は、このメタ・フィジカルな人間像をめぐって展開される。そうした思想を総合的に体系化したのはトマス・アキィナス (Thomas Aquinas, 1225?~74) であった。

トマスの壮大な思想体系の中で人間はいかに意味づけられたか。人間はかれの宇宙観の中にしかるべき位置をもつ。宇宙は神が頂点にあり、全存在が高低の序列に編成された階層秩序 (hierarchy) を構成する。より高いものより低いものを支配する。神が世界を、魂が肉体を支配する。どんな低い地位にある存在でも、それはそれなりの価値をもつ。それは地位をもち、義務と権利とをもち、そのことを通して全体の完成に貢献している。この調和ある身分的秩序は神への服従を原理としてつらぬかれている。人間は被造物の中で独特の位置をもつ。あらゆる存在のうちでかれのみが肉体であると同時に魂である。理性的な魂をもつがゆえに人は神に近い。この人間性の根本的事実を基礎に制度と法がすえられ、それによってかれの生活は規律される。<sup>(10)</sup>

人間の理性的能力とは神の支配する調和的秩序、神的な「自然」を理解する能力を意味するのである。自然と社会は神の理性によって支配されており、この理性、あるいは目標は四つのレベルで自己を顕示する。それは永久法、自

然法、神法、人法の四者である。

こうして人間と社会がその生活を規制し、方向づける目標としての秩序は人間の外側に設定された。人は神の秩序に服従することが理性にそった道となった。トマスのきわめて形而上学的な思想体系の中では自然科学にもとづく生物学的人間は積極的に評価されることはなかったのである。

▲ルネッサンス▼

中世の宗教的権威による人間的自由の拘束は一三世紀イタリアに始まるルネッサンスの知的・社会的な運動によって徐々にこわされていった。人間についての科学が理性にもとづいて発展していくことになるためにルネッサンス運動は三つの方向で作用した。第一はルネッサンスの名が示すように古代ギリシアの文芸復興である。これは宗教的権威にかえて人間中心のヒューマニズムを鼓吹した。第二は宗教改革である。信仰の個人化を指向するプロテスタントイズムと宗教的権威の多元化とが教会の権力を弱めることになった。第三は自然に対する科学的発見の蓄積である。これは聖書とローマ教会の擁護する神話的自然観の根拠をほりくずしていった。

政治理論の分野でアリストテレス的人間観が復活してくるのはかなりおくれた。マキアヴェリはこの分野でルネッサンスの風潮を代表し、トマスの人間観に対抗する人間観にもとづく「君主論」等の著述を発表した。すなわちマキアヴェリ (Niccolo Machiavelli, 1469~1527) は人間は神から与えられた秩序のなかにはめこまれ、その秩序に従っていくのが理性的であるとされるような存在ではなく、現実の人間は利己的な欲求でもって行動する存在であることを主張した。そうしてこれら欲求の主体である個人が集まって社会関係をつくっており、そこに当然起こる秩序樹立の役目が政治の課題であるとしたのである。

▲ホッブズ▼

マキアヴェリよりかなりおくれで、清教徒革命の時期のイギリスでトマス・ホッブス (Thomas Hobbes, 1588~1679) はその「反中世的態度」、自然哲学の重視の立場からより現世的な人間像を説いた。かれは主著リヴァイアサン (Leviathan, or The Matter, Forme, & Power of a Common-Wealth Ecclesiastical and Civil, 1651) で人間が社会を形成する以前の「自然状態」を仮定する。自然において人間はかれの生存の諸要求を実現する能力において平等である。平等な能力をもった複数の人間が生存の維持や快楽の充足等の欲望から有限のものを求めて争う。敵意と不信感がここに生じる。また人間は誇りの保持に敏感に反応する。こうして自然状態は人間相互間に起こる競争と不信と誇りの三者が主要な原因になって「万人の万人に対する戦い」の状態を現出する。戦いとそれにそなえた緊張状態の中の、恐怖と死の危険で「人間の生活は、孤独で、まずしく、険悪で、残忍で、しかもみじかい。」<sup>(11)</sup> 人間はこのみじめな状態から死への恐怖と快適な生活への意欲と勤労によって生きることの希望という情念と平和の条件をうち立てる理性とによって、平和と生存保持のために個々の権利を放棄し、国家へ譲渡する社会契約を結ぶ。こうしてできる国家は、人びとの無限の欲求を制御する役割を果たすことを望まれているので、その主権はほとんど無制約に近い。かれが絶対主義の唱導者といわれるゆえんである。

ホッブスの人間観は第一に絶対主義的な地域国家の主権を正当化する現実的要請から想定されたものであるので、それは観念的に想定されたという観念性をおび、かつまた人間の闘争性が一面的に強調されたものとなっている。この点でそれは生物学的人間像になりえていない。しかし第二にその人間観は中世の形而上学的宇宙観を脱却して、人間社会の現実から構想されているので現実的・自然主義的人間像を示している。そうして第三に人間は動物と同じく感覚的存在であり、利己的欲求をもつが、他方、動物とことなり、言葉をもち、それを用いて推理し、判断する理性をもっている。

第四に人間の欲望は無限であり、それを充足するために人間は「つぎからつぎへ力をもとめ、死によってのみ消滅する、永久不断の意欲」<sup>(12)</sup>をもっている。人間は権力欲のとりこである。それはいまある力で得た安全を確実にするためにさらに力をもとめ、安全をえたものはさらに別の快楽をえようとするからである。そうして人間にめぐまれた理性はこの無限の欲望を自らコントロールすることはできない。アリストテレスとちがってホッブスは欲望と理性についての悲観論者である。第五に理性は人間社会の秩序を形成するために働く。理性によってつくられた主権国家をとおして理性は間接的に、他律的に社会秩序をつくりあげる。第六に自然状態の人間はまったく孤独な個人的存在としてえがかれている。この点がかれの人間観のもっとも観念的なところであろう。生物学的人間は孤独な個人ではないのである。

《ジョン・ロック》

近代国家の権力体制の前提としての人間観の追求は近代政治理論の主要テーマの一つである。イギリスではホッブスについて、名譽革命の時期に活躍したジョン・ロック (John Locke, 1632~1704) はその社会契約説でホッブスとは異なる自然主義的人間像を提示した。

ロックの「自然状態」では人間は生命の安全、自由、財産を享受している。ホッブスと逆の形がでるのは、ロックは人間の労働による富の豊かな生産という要素を入れたためである。ホッブスの場合は人間の無限の欲望に対し分配されるべき富は限られていた。そこに争いが生ずる。ロックでは富は労働で生産されるから、そこに分配をめぐる争いは大はばに緩和されるのである。この人間が社会契約をむすんで国家をつくるのは相互間の、また他の国家との間に起こる紛争を解決してもらうための共同装置としての役割を期待するからである。国家の役割はホッブスの場合に比べて著しく軽くなるのである。

ロックの人間はホッブスより一段と生物学的人間に近づく。かれは感覺的存在としての人間を積極的に肯定する。人間の知性も感覺に根ざすと見る。「すべて感覺のうちになかったものは一つとして知性のなかに存在しない」のである。こうして人間の理性能力もその生物的存在性の中にふくめられる。そのユニークな発想、人間の労働性もその理性能力とむすびついた文化的行動であるといえる。果実をとるといふ労働によってその果実を自己のものにするという採集経済を例に引いてロックは人間の富の蓄積の原初的方法を説明している。

人間はたしかに山地に住み食糧を採集する霊長類の一種として進化してきた。そうして今日のたべものを集めるだけではなく、何日分かの蓄積を行なった。この未来を考えた余裕のある食糧採集の仕方が人間の美意識を育てたといわれる。ここには計画性も育つであろう。山から原野に移って農業耕作に入ると、これこそまさにカルティヴェイションで文化的な営みとなる。労働は動物には見られない人間の理性的な・文化的な働きの一部である。こうしてロックは自然状態に「理性的であつてかつ勤勉な」(ラシヨナル・アンド・インダストリアス)人間性を想定する。ホッブスの場合は人間の理性は人間の無限の欲望が衝突するアナキーを克服するため、社会契約にうごき、国家をつくり、その他律的権力によって間接的に社会秩序を形成した。ロックの場合は人間の理性は「自然状態」で直接的に、すでに働き、自律的に秩序形成に進んでいるのである。ロックは「感性的人間の自律性」という重要な人間性を前提することによって、ホッブスの自律できない感性的人間の自然のアナキーを制御する強大な他律的権力を国家に期待する必要はなく、すでに働いている自律性を補強するような共同装置としての軽量の国家を求めることで足りたのであった。

しかしロックの人間は、かれの社会契約の前提になる仮定の「自然状態」の住人であった。その住人は自然法の理性が支配するもとの自由で平等な個人であつて平和裡に生産労働に従い、富の所有をうけた。このような個人主義

的人間像はかれの哲学的先入観の上にえがかれていて、生物学的人間像とは方法論的に別の存在であった。またその特徴である人間の「労働性」はむしろ人間の文化性を示す要素であって、直接の生物性からは文化的進化の媒介をへて達せられるべきものであった。

△マルサス▽

ロック以後政治理論固有の分野で人間の生物学的条件と政治との関連ですぐれた観察を残した思想家はもちろん多い。その中でとくにモンテスキュ (Montesquieu, 1689～1755) が「法の精神」 (Espris des lois, 1748) で行なった政府と法の構造と機能についての社会と自然環境からの条件づけは注目すべきものであった。しかしアリストテレスのように政治学の大家であると同時に傑出した生物学者でもあるような学者はもはや後代の諸学問が専門分化して発達した段階では求められなくなっていった。政治学者が生物学的人間像を適確につかむためにはかれの政治理論体系が自然科学の諸成果をその境界領域で受容できるように編成されていなければならぬし、また自然科学の成果も利用されやすい形に確定しておらねばならない。政治学と生物学との間にこのような協調関係が形成されてくるのは第二次大戦後の一九五〇年代をまたねばならない。それまで社会科学者の側から人間についての生物学的要素のある側面が強調され、他方生物学者から人間の基本的認識の修正がせまられることが見られた。

マルサス (Thomas Malthus, 1776～1834) は一七九八年「人口論 (An Essay on the Principle of Population)」を発表して、人口と食糧との関係に関する人間についての生物学的法則を説いた。それは人口について第一に人口は幾何級数的に増加し、食糧は算術級数的に増加するので、両者の増加率の相違から食糧の不足という終極的制約 (ultimate check) が生ずること、第二に流行病・戦争・極端な貧困・激しい労働のような人間の寿命を縮める諸原因—減殺的制約 (positive check) —と結婚を控えるなどの意識的行為の阻止的制約 (preventive check) がはたら

くことの二つである。そしてどこの国でも第二のものが色々な程度と態様で作用している。人口圧力は緩和され、第一の終極的制約に直面することは飢饉の際をのぞいては起きることはない。しかし食糧増加をこえた人口増加の基調は存在しているので、これが下層諸階級の生活の改善を妨げている。ここからマルサスは資本主義社会における労働者の貧困は社会制度によるものではなくて、この人口法則によるものであると主張したのである。

マルサスの人口法則による社会制度の免罪は賛成できないが、この人口法則の存在とその人類の社会生活に対する圧力は承認しなければならぬであろう。

#### △モーガン▽

マルサスは人口という人間の集団としての生物的事実をとりあげたが、アメリカの人類学者モーガン(Lewis Henry Morgan, 1818~1881)は家族と婚姻というさらに深いレベルで生物としての人間集団をとらえ、野蛮から文明に至るこの両者の形態の段階的進化の仮説を打ち立てた。

モーガンは「古代社会」(Ancient Society, or Researches in the Lives of Human Progress from Savagery through, Barbarism, to Civilization, 1877)でアメリカ・インディアンについて行なっていた実証的研究を集成した。「人類の存在は無限に後方に拡がるのであり、広漠深遠な太古の中に消えている」<sup>14</sup>人類の過去は氷河期以前の地質学的時代にはじまり、以来「人類は人類と同時代に存在した多くの種類の動物よりも生きながらえた。」そして人類種族は一路発展の過程を経過してきた。モーガンは人類文化の発展は野蛮・未開・文明の三つの主要時期を順次経過し、野蛮と未開はさらに前期・中期・後期の三段階をとおると見る。人類はその発生当初、樹上生活者として果実を食し、他の動物にまじってその生存を競っていた。しかし「人類のみが、食糧の生産に対して絶対的な支配を獲得したと言いうる唯一の生物」<sup>15</sup>となりえたことが、地上における、他の生物に対して「人類の最高性」を達成せし

めた。それは人類の生存と繁殖を保証する有力な手段となったからである。そして発明と発見による技術の進歩と生活資源の拡大とが人類の文化発展を区分する標識となる。

つぎにモーガンは人類文化の進歩に二つの系統を区別する。その一は発見と発明による系統で、これは累進的關係を示し、他の一は本源的制度を通じた系統で、これは展開的關係を示す。つまり前者は人間の生活に「直接の関連」をもつのに対し、後者は「若干の本源的な思想の胚種から発展」するものである。そうしてかれは進化をとらえる標識として発明と発見のほかに、①生活、②政治形態、③言語、④家族、⑤宗教、⑥家屋生活および建築、⑦財産をあげた。<sup>16)</sup>生活技術は発明と発見と直接関連する部分に、政治形態の萌芽は野蛮状態の氏族組織に求められる。言語は身振りのような表象言語から有節的言語に発達する。財産の觀念も野蛮時代に発生し、いろいろな經驗の蓄積をへて、この觀念が一つの情熱として他のすべての情熱を支配する文明時代に入り、地域と財産とを基礎とする政治社会を確立させる。かれは政治組織の形態に二つの型を区別した。第一のものは人および純粹に人的な關係に基礎を置くもので、社会として識別される。氏族 (gens) がこの組織の単位であり、古代において氏族、胞族 (phratry)、部族 (tribe) および部族の連合体 (confederacy) とより大きい統合形態をもった。そうして後期において民族が部族の連合体にとつてかわる。第二のものは地域と財産とに基礎を置く国家である。「氏族は同一の共通の祖先から由来した血族の一体であり、氏族名によつて区別され、血縁によつて結合されている。<sup>17)</sup>原始時代は氏族は一人の仮想の女性を祖先とする女系氏族が一般的であるが、集團的財産の出現後に氏族は一人の仮想の男性を祖先とする男系氏族に変化した。ギリシャおよびローマに都市国家が政治的社会として組織されたのち「この古代の由緒ある組織は、それから発達した胞族および部族とともに徐々にその存在を失った。<sup>18)</sup>」

氏族系列の社会組織の進歩に平行して、より基礎的な要素である家族と婚姻制度の進化がある。モーガンは血縁家



族・プナルア家族・対偶婚家族・家父長制家族・一夫一婦制家族の進化系列を示した。血縁家族は一集団内における兄弟姉妹の通婚を基礎とする。これは家族の最初の形態である。プナルア家族は、ハワイ人のプナルア家族関係から名称をとったもので、これは一集団内の数人の兄弟たちと相互の妻たち、および一集団内の姉妹たちと相互の夫らとの通婚を基礎とした。ここで兄弟とは遠い従兄弟関係も含まれる。姉妹についても同様である。対偶婚家族は排他的な同棲をとまわらない結婚の形式をとった、一人の男子と一人の女子との配偶に基礎をおくもので、一夫一婦家族の萌芽となる。部族内で氏族は通婚を規制する単位となる。同一氏族内での婚姻はゆるぎされない。氏族間でも双方が同一の出自で近縁の場合はその間での婚姻が許されない場合がある。

以上、人類が動物の一種として地球に生命をもち、他の動物に対してその独自の文化を形成していく原始・野蛮の時代の生活形態についてのモーガンのユニークな所説を要約した。かれは植物をふくめた生物の一般規定、生存と生殖についてその人類的様式の原始の態様にすぐれた実証的洞察を行ない、それを著述した。かれは生物学的人間を全体として把握し、この基礎が発展していく社会・経済・政治の人類文化の初期段階にいかにかかわったかを解明したのであった。

#### △エンゲルス▽

マルクスとエンゲルスは唯物論的な歴史研究の成果の関連でモーガンの研究を大きく評価した。<sup>(19)</sup>マルクスは死後、「古代社会」に関するノートを遺していた。エンゲルス (Friedrich Engels, 1820~1895) はこのノートの趣旨にそってモーガンの説を整理・紹介しながら古代のギリシャ人、ローマ人、ゲルマン人についての自己の見解をつけ加えて「家族・私有財産・国家の起源―ルイス・H・モーガンの研究に関連して―」(一八八四年)を發表した。ここでエンゲルスはいう。

唯物論の見解によれば、歴史における窮極の規定要因は、直接的な生命の生産と再生産である。しかし、これ自体はまた二種類のものからなる。一方では生活手段すなわち衣食住の対象の生産と、それに必要な道具の生産であり、他方では、人間自身の生産すなわち種の繁殖である。特定の歴史時代の特定の国の人間がそのもとで生活する社会的諸制度は、二種類の生産によって、すなわち、一方では労働の、他方では家族の発展段階によって、制約される。労働がなお未発達であればあるほど、その生産物の量が、したがってまた社会の富が制限されていなければならない。社会秩序はそれだけ強く血縁的紐帯に支配されて現われる。<sup>(20)</sup>

労働という文化的要因と生殖という自然的要因とが社会的諸制度を基本的に規定する。そうして生産力の未発達の間、すなわち人間の生存を維持する食料の生産力がまだ小さい段階では社会秩序は血縁組織の血の論理で支配される。さて労働の生産性が発展し、それにもなつて私有財産、交換、富の差別、他人の労働力の利用可能性も発展し、階級社会が成長してくる。「血縁団体に立脚する古い社会は、新しく発展してくる社会的な諸階級と衝突して破砕される。」エンゲルスはこの文化的なものとの非両立性を指摘する。ここに階級支配を基礎とする国家が出現するが、国家の下部単位は、もはや血縁団体ではなくて地縁団体である。社会では家族の秩序は完全に所有の秩序によって支配されるようになる。

かれは文明の発端をなす商品生産の段階を、①金属貨幣、それとともに貨幣資本、利子、②商人、③私的土地所有と抵当、④奴隷労働などによって特徴づけ、家族形態としては単婚・男性優位・社会の経済単位である個別家族であり、文明社会を総括するものとして国家が成立する、とした。<sup>(21)</sup> そうしてかれはこの文明をつぎのように総括する。

このような基本的制度によって、文明は、古い氏族社会の手にはどうてい負いえなかった事柄をなすとげた。しかし、文明がこれをなすとげたのは、人間のもっともいやしい衝動と情欲を動かし、人間のもつ他のすべての資質を犠牲にしてそれを発展させたことによるのである。まったくの所有欲が、文明の第一日から今日にいたるまでの推進的精神である。一にも富、二にも富、そして三にも富、しかも社会の富ではなく、この個々のけちくさい個人の富、これが文明の唯一の決定的な目標であった。<sup>22)</sup>

このようにエンゲルスは生物学的人間のいじましい欲望の追求とその輝く文明とを連結する。しかし最後に本書のスタートのモーガンに帰って、「人間の理性が富を支配するまでに強まり、国家とそれの保護する財産との関係、ならびに財産所有者の権利の限界を確定する時代がくるであろう。<sup>23)</sup>」と理性に願いを託する。そうしてその理性の富に対する支配の結果は、昔の氏族の自由・平等・友愛のより高度の形態での復活であろう、と美しい夢を披瀝するのである。エンゲルスは結局、人間の社会秩序は最初は生物学的人間の血の原理に直接支配されるものであったのが、文明への移行によって労働の生産物の分配の原理、換言すれば生物学的人間の生存の原理の間接的な貫徹によって支配されることになるようである。ともあれその「家族・私有財産・国家の起源」は人類の先史を動物のレベルから家族を経て、欲望実現の文化的手段としての私有財産制、そうして国家の成立に至る実に楽しくドラマティックな史観の展開であるといいたい。

#### 《ダーウィン》

ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809~1882) はイギリスの生んだすぐれた博物学者である。かれは一八五九年「種の起源」(Origin of Species) を出版した。それは詳しくは、「自然選択の方途による種の起源、すなわち

生存競争において有利な種族が存続されることについて」と題される。これはその題のごとく生物進化について自然選択、生存闘争、適者生存の原理を説くものであった。ダーウィンはマルサスの人口論から生物間の生存闘争の発想を得ていた。そこから自然選択説がでてきた。すなわち生存闘争の環境のもとでは都合よい変異は保存され、都合の悪い変異は絶滅しやすい。その結果として新しい種が形成される、というのである。自然選択説によって、生物のある種が別の種から進化してくること、またより幼稚なものからより複雑なものへと進化していくことが証明された。これがダーウィンの進化論である。進化論的考え方は一八世紀から博物学者によって主張されていたが、ダーウィンはこれを科学的に確立された学説にした。ダーウィンはついで「人類の由来」(Decent of Man, 1871)を發表し、そこでは霊長類として人間と類人猿は共通の祖先をもつことを明らかにした。

ダーウィンの進化論の第一の影響はルネッサンス以来の思想の自由の発展に対してキリスト教神学から行なわれていた権威主義的干渉を決定的に排除するのに役立った。神はみずからの姿に似せて人間を造り給うたと聖書はいつているのに、ダーウィンは人間は猿から出て来たことを証明した。「神はいわゆる進化によって創造の任務を取り除かれ、不変の法則<sup>(24)</sup>によって世界支配の任務から放免される<sup>(25)</sup>。」と篤信のグラッドストーンはその嘆きを表現した。

その第二の影響は生物学界をこえて社会思想の面にまで進化論を適用するダーウィン主義を生みだしたことであった。その主張の一は、ヒトは知性をもつがゆえに動物から脱し、さらに知能をはたらかせて、物質的成功と道德的高潔さとを達成し得た、とごく一般的に承認できるものである。その二は自由放任論者のとく無秩序な経済的競争を合理化するのに援用されたことである。H・スペンサーのいうように競争が「最適者生存」をもたらすとか、社会福祉政策は対人競争の進行をさまたげるとかである。<sup>(26)</sup>その三はこれとは反対に、集産主義者のクロポトキンのように、ダーウィ人がヒトの同情心や社会道徳は進化の初期にできたとの考えを發展させ、進化におけるこの協同的要素を強調

しようとするものもあった。その四は今世紀の二〇〇三〇年代にあらわれたものであるが、帝国主義的あるいは人種主義的イデオロギーを正当化する理由にされたことであった。

これらはいずれもダーウィンの進化論の一部を、その主張者たちの、政治的、経済的、倫理的に既にもっている先入観念を補強するために利用されたのであった。そのためダーウィン学説は不当に警戒の目をもってむかえられる風潮を招いたのであった。ともあれ本稿としてはダーウィンの進化論はヒトと動物の連続性を科学的に証明したこと、またヒトの知性が動物界の優者の位置へ進化せしめたことを確認しておけばよいのである。

人間が生物学的人間であることはダーウィンをもって社会学者にとってさげがたい前提になったといつてよい。しかしそれが社会科学の方法の中で消化されるには、ダーウィンのときよりさらに一〇〇年が経過しなければならぬ。それについてはあとでとりあげたい。

- (1) Aesop 紀元前六世紀の人。その動物寓話集は古代ギリシャ、ローマ時代以来、現代に至るまで知恵の書として知識人をはじめとして広く、聖書について愛読されている。本稿の話は英語版からとった。
- (2) Aristoteles *Politica* 山本光雄訳「アリストテレス・政治学」第一卷第二章三五頁。
- (3) 同上。
- (4) 同上書、第一卷第二章三六頁。
- (5) 同上書、第七卷第三章三四二頁。
- (6) 同上書、第七卷第一五章三五〇―一頁。
- (7) 同上書、第七卷第一六章三五二―三頁。
- (8) 同上書、第七卷第一七章三五九頁。
- (9) 同上書、第八卷第五章三六八―七四頁。
- (10) George H. Sabine: *A History of Political Theory*, 1954, p. 219.

- (11) 水田洋・田中浩訳「ホッブス・リヴァイアサン」 $\wedge$ 国家論 $\vee$ 」一九六六年、八四―五頁。
- (12) 同上書六七頁。
- (13) 福田敏一「近代の政治思想―その現実的、理論的諸前提―」一九七〇年、一二八―四〇頁。
- (14) モルガン著青山道夫訳「古代国家・上」一九五八年、一九頁。
- (15) 同上書四三頁。
- (16) 同上書二四―七頁。
- (17) 同上書九八頁。
- (18) 同上書一〇〇頁。
- (19) エンゲルス著戸原四郎訳「家族・私有財産・国家の起源」一九六五年、九頁。
- (20) 同上書一〇頁。
- (21) 同上書二三三頁。
- (22) 同上書二三四頁。
- (23) 同上書二二六頁、「古代社会・下」三八九―九〇頁。
- (24) 自然現象は、同時に併存し一定不変の法則に従って相互に関連し合う事物の体系である。この命題は一九世紀初頭に科学の公理として主張され、J・S・ミルによって定式化された。各瞬間における全宇宙の状態はそれに先行する瞬間における状態の結果であるということの意味する。
- (25) 同上書一七〇―一頁。
- (26) これをとくに社会ダーウィン主義という。

## 二 ヒトと動物の連続性

ヒトと動物がその生物性においていかに連続するか。植物を含めて生物の一般規定である、①新陳代謝②生殖の二作用と、更に動物について③移動性、この三点は人が動物と共有している一般性である。こうした一般性が人と動物

の生活の様式でいかに類似しており、又相違しているかが第一の問題である。しかしこの第一の問題は極めて生物学的問題であって政治学の当然の課題ではない。政治学の課題はすぐれてヒトの社会性にかかわる。それ故われわれにとって必要なことはヒトの社会性を意味づける動物の社会性の解明である。動物についてのこの学問領域は動物社会学のうちにある。それゆえ動物の社会性のうちヒトの社会性、さらに限定すれば、政治行動にかかわる社会性が動物といかに共通であり、いかに相違しているかということが第二の問題となる。その解明は人間の政治行動の解明に大いに有用であるであろう。本稿はその部面ですでに明らかにされている研究の若干を紹介してこの課題にきわめて不十分ながらとりくんでみよう。

#### △ヒトの文化性と自然性▽

ヒトは文化をもった動物であるといわれる。ヒトはその文化形成を通じて超生物的存在になったともいわれる。そしてヒトの文化性についての楽観主義は、ヒトの知性と学習能力は身体や社会の諸問題をやがて解決するものと期待した。しかしこの楽観主義は今世紀になって人類が経験した政治的、社会的変動によって、無残にくずれ去った。人間はヒトの自然性の強固さにあらためて思い知らされた。モリス (D. Morris, *The Naked Ape*, London, 1967) はこの関連をつぎのように要約した。

文化の発達には、ますますめざましい技術的進歩をもたらしているが、その文化が我々の基本的な生物学的特質と衝突すると、どこでも強い抵抗が起こる。ヒトの行動の基本的な型は、人類の発生当時は狩猟性のサルのごときものであったが、今尚その根柢はいたるところに見られ高尚だといわれる行動においても然りである。われわれの現世的行動―食事、恐れ、攻撃、性、育児など―の体制が文化的手段によってのみ発達してきたものならば、われわれ

これは今日までこれらの行動をもつとらまくコントロールできただろうし、なんとかうまく切り抜けて、技術の進歩によってもたらされる法外なもろもろの欲求に行動をうまく適合させることもできたにちがいない。然し実際にはそうはしなかった。われわれは動物的なるものに再三屈服し、われわれを内から駆り立てる複雑な獣性の存在を無言のうち<sup>(1)</sup>に認めてきたのである。

ヒトの文化性と自然性とは衝突した時、自然性が優先するのである。行動科学的に表現すればヒトの文化性はその自然性の従属変数であるといえよう。

#### △狩猟と採集の原始社会▽

動物の行動の適応と棲息地の間には密接な関係がある。棲息地は自然選択を通じて行動に影響を及ぼす。また同種の動物群で、それは行動に系統的な変異をも生じさせている。

ヒト属について見ると、ヒトは狩猟社会、農村社会、牧畜社会、工業社会にと順次発展する社会に生活して来た。しかしヒト属が現われてから二〇〇万年のうち農耕社会以後の社会での生活は一万年にも満たない。ヒト属の生活史の九九%以上が狩猟社会での狩猟と採集の生活で占められている。ヒトは狩猟者として進化し、地理的には世界中に狩猟者として広がった。<sup>(2)</sup>

狩猟と採集の生活がヒトの行動に及ぼした影響は極めて大きくかつ深い。ソマーズのテキストによつてその概要を記してみよう。<sup>(3)</sup> ヒトの狩猟者としての行動範囲は、主に草食性で局所的に移動する現在のヒト以外の霊長類の行動範囲よりもはるかに広い。<sup>(4)</sup> おそらく狩猟そのものために行動範囲の拡大は必要であつたし、そのために広い地域の地勢を学び、その地域の危険をさげながら、資源を開拓する能力や機会を広げる必要も起きてくる。このような必要か



ら神経系の能力は大きくなり、子供は集団年長者にたよっている期間が長くなるようになった。それ程強くもなく、身体に武器をもつてもいないヒトのような動物は、狩猟やそれに続く屠殺で、技術や計画、共同が必要である。狩猟の後の獲物の分配で分け前をきめ、どんな交換をするかも重要な仕事になる。食べ物の分配は主として草食性のヒト以外の霊長類では普通みられない。チンパンジーでは分配は母親と子供の間でさえみられない。ヒト以外の霊長類の子供は離乳してからは普通ひとりでえさをあさるのである。

ヒトの運動制御の分化はよく知られている。脳の運動領はオナシザルのものよりも三倍も大きい。特に指は分化した中枢神経制御を示している。手の働きは霊長類の中でヒトに特有である。手は移動の役割から真に解放されている。狩猟は又身体的熟練や武器、共同作業と同様にその世界についての知識を必要とさせる。狩猟生活はヒト属にこのような生態学的適応を得しめたのである。

#### 〈感覚とコミュニケーション〉

動物は環境の情報を感覚受容器で受けとる。この反応を感覚という。受容器に作用する諸事象を刺激といい、刺激を選択し、体系化し、一つのまとまりあるものとして統合的に認知する事を知覚という。感覚の種類として視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚の五感<sup>(5)</sup>がある。環境との情報系のうち動物の種内のものがコミュニケーション(情報の伝達)であるが、これが動物の種内の社会関係をなり立たせているものである。動物の社会性は種の生存の維持と生殖という基本的機能を軸心として備わっている。それゆえ、同じく生物の一員としてヒトとそれ以外の動物の社会性は本質的には共通の要素を多く持ち、その意味で連続性を豊かに示している。しかし社会性の態様や量的な効果の点ではきわめて大きい差異が存する。ヒト以外の動物では抽象的思考、コミュニケーション手段、文化的手段の点でヒトにくらべてはるかにおくられているからである。

コミュニケーションの方法に化学的、視覚的、聴覚的、触覚的なそれが区別される。これらの方法の機能には動物の備える感覚器の性能が関係する。

化学的コミュニケーション 化学物質に対する感覚によってコミュニケーションを行なうもので、脊椎動物は味覚と臭覚でこれによる情報を検知する。イヌやオオカミは尿や糞をかけて道順を明らかにする。ヒトの場合は「移り香」などがこれである。しかし樹上生活者であった霊長類では、特にヒトではこの感覚能力は退化の傾向にある。

視覚的コミュニケーション これは多くの動物の間で用いられる。形態、色彩、光などが刺激として働く。鳥類の雄の豊かな色彩は雌を誘引する手段となる。ホタルは発光によって異性を呼ぶ。哺乳類では顔面の表情や尾の動作、全身的な姿勢の変化によって視覚に訴える情報をつたえる。又視覚的コミュニケーションは色、トサカ、タテガミ、身振りなどの働きをともなって誇示行為に用いられる。

ヒトの視覚は動物の中で特に発達している。ヒトは二本の足で直立姿勢をとっているので、四足獣の場合より視野が広がる。又ヒトは視覚的表象が豊かである。姿勢、顔の表情、身振り、手振りなど多様な表現を行なって視覚にうったえる。更に絵画、文字によって高度な感情や複雑な抽象的な意味を視覚を通して伝える。

聴覚的コミュニケーション 各種動物にみられ、発信器、受信器ともに複雑である。聴覚器は振動覚器の発達したもので、哺乳類では耳小骨、鼓膜の構造ですぐれている。媒体は空気と水の二つであるが、空気の伝導の方が種々の点で能率的であり、陸生の動物の昆虫と脊椎動物はこれに頼る。哺乳類や鳥類では共鳴装置の構造が複雑となり、音の高さや音色の変化が複雑になる。ヒトの声は鼻、口から腹に至る多くの器官の共鳴、摩擦によって出されるので、変化のはばがいちじるしく、言語形成にあずかる。なお打撃音もこの一種でキツツキのくちばしで木を叩く音、ゴリラの胸を打つドラミング、ヒトの拍手などがこれである。聴覚的コミュニケーションが視覚的コミュニケーション

ンより有利である点は相手が視野に入っていないくてもそれを行ないうるということである。音によって集合を促進したり、逆に分散を促進したりする。また誇示行為にも用いられる。プラトン、アリストテレス、孔子はヒトの聴覚的コミュニケーションを利用した音楽がヒトの性質に与える影響をきわめて重視した。

触覚的コミュニケーション　これは個体間の接触を通ずるもので、群生動物などの鼻先、くび、胴体などのこすりあい、サルのグルーミング（毛づくろい）、ヒトの握手や抱擁などにみられる。<sup>(6)</sup> 哺乳類ではこの方法が多く見られ、親近感を伝えるのに用いられる。これは哺乳類は皮膚感覚が非常に発達していることからくるとされる。盲人の点字は指頭の皮膚感覚を利用したものである。

これら個体間コミュニケーションは、中枢神経が発達した場合にその情報内容が豊かにされる。この点で言語をつかうヒトは他の動物との比較を超えた超能力をもつものといえる。

### 〈生殖〉

脊椎動物がとっている有性生殖は、各個体が両親から遺伝物質をうけとる。その根本的な利点は、①遺伝的な多様性の増大、②個体群を通して二個体の親からの遺伝物質の配分の結果としておこる遺伝的改良が早く伝えられること、である。遺伝的な多様性の増大は、その種が多様な環境に反応する能力を高めることになる。<sup>(7)</sup>

有性生殖は雄と雌とに性分化した両親から遺伝物質をうけるものであるが、この雌雄の性分化は哺乳類においては、外面的にあきらかであるが、内部の生理学的、内分泌学的要素と過程とでは、むしろ雌雄間の重大な類似性が指摘されてきている。ヒトの場合、男女の区別は多くのレベルでなされている。すなわち体の肉づき、強さ、性質、生殖器官の形態と生理などである。しかし人間全体を通じてみればこれらの区別は必ずしも明瞭でないし、また一貫したものでない。しかもこれらの区別のあるものは社会的、文化的な影響を多くうけているのである。要するに男と

女が生理学的に類似性を多くもっていることは哺乳類一般と同様である。

ほとんどの脊椎動物は性行動のためにつがいの関係に入る。つがい関係は性行動の完了と同時に短期間で終る場合と長期間にわたる場合とがある。通例つがいの両親が卵や子供の養育にあたる。

哺乳類の性行動において、個体の成熟以前の性的な探究や遊びが重要な役割をもっている。リースザルは雄も雌も生れてまもなくマウンティングの遊びをする。霊長類は食肉類よりもそのような行動をよくし、また雌より雄の方がよく見せる。<sup>(8)</sup> 未成熟の個体を群から隔離しておくことのような学習経験をもち機会をもたない。サルが誕生後六ヶ月の間、他のサルとの接触なしに育てられると、かれらは適切な交尾行動をまったく行ないえなくなるという。このような隔離を経験した雌ザルは子供をもったとき、子供を無関心に取り扱い、ときには致命的な暴力をふるう。サルにとっては群の社会的環境に育つことが正常な交尾行動や母子関係に影響するわけである。また社会的に隔離されたサルはつがい関係や遊び活動に障害をうけ、正常な性向まで減退するようになる。<sup>(9)</sup>

子供の養育は脊椎動物では通例、行なわれる。ネズミの母親と子供たちとは、相互依存のコミュニケーションの体系をつくっている。生れたばかりのネズミたちは初期の発育、哺乳、排泄などに母ネズミからの適切な刺激を必要とするのである。

「刷り込み」(imprinting)は動物の生涯のある特定の時期に起こるある種の急速な学習行為をいう。ガチョウのヒナが孵化後二四時間以内に親のあとをついて歩けるといふ事実はその一例である。親のあとをつけるうちに、ヒナは親の視覚による信号と呼び声を覚え、親と他のガチョウを識別できるようになる。成体の形質についての刷り込みの過程は、そのヒナが成体になっても維持される。つまり親の個々の刺激パターンばかりでなく、ガチョウとして全般的な刺激形態が学習される。したがってその親を刷り込んだヒナは成体になっても自分と同種のガチョウを見分け

ることができるのである。刷り込みはわずか数時間という臨界期のうちにのみ起こり得る。もし刷り込みがヒナになされないときは、そのヒナは成体になっても、自分と同種の仲間と永続的な関係を形成することができなくなる。哺乳類でもこの刷り込み現象は多く見られる。

「刷り込み」の過程はヒトを含めた霊長類において子供の正常な発育が社会的環境に強く依存していることを示す。子供が成人の社会行動を習得することを社会化 (Socialization) とよぶが、社会化過程には家族を含めた子供の社会的環境が主な役割を演ずる。子供のときに群から隔離されていた日本ザルは群に入っても群の社会的規律のしつけをうけていない。ボスザルの前をとる時にはシッポを下げて服従の姿勢を示さねばならないが隔離ザルはそれを知らないでシッポをあげたままボスの前をとおり、まわりのサルから制裁をうけるのである。この社会化はヒトの社会でいえば権威についての政治的社会的な一部である。

動物の生殖過程はそれ自体が社会的関係であるだけではなく、その全過程に種の社会性が表面にあるいは前提にかわってくるものであるのである。

#### 〈攻撃行動〉

動物は威嚇と身体攻撃を含む攻撃行動をするが、その攻撃行動はときに誤認されるような盲目的で不合理な暴力ではない。それは摂食、なわばりと社会構成の維持、個体あるいは群の防御、性行動や養育行動など多様な動物活動の随伴行動として発達してきた。それゆえ攻撃行動をそれだけ切り離して見るのは適当でない。たとえばヒト以外の霊長類の攻撃行動の大部分は、社会組織の確立とその安定化に関係している<sup>(10)</sup>。それらはサル相互の性的な、食物獲得の、あるいは防衛的な諸問題を調節する効果をもつ。この調節は平穏な仕方では達成されえないが、しかしその争い

は勝手気侷な敵意ある闘争とはほど遠いものである。

動物の攻撃行動は、①異種間にむけられるもの、②同種間におこるもの、③両者の区別のないもの、に分けられる。異種間で起こる攻撃行動の多くは、他の動物を捕食するか、逆にそれらから身を守るように反応する、ともに捕食行動と関連する。

捕食行動には、オオカミの場合を例にとって見ると、えもの探索や襲撃に集団の共同行為が見られ、またえもの特性によって区別された襲撃方法の遺伝によるかあるいは学習によるかのその会得が見られる。さて捕食的襲撃に対して多様な防御反応が見られる。とくに鳥では、攻撃の先手を打って攻撃的な「群れ反応」<sup>(11)</sup>が見られる。捕食と防御では、反応の形態についても、動物の情動的な状態についても、かなりのはっきりした区別がある。防御反応にはとくに、強い情緒的な昂揚と体の神経系および内分泌系に起こる緊急反応とをともなっている。<sup>(12)</sup>

同種内の攻撃行動は一面的な威嚇や襲撃と見ることはできない。まず「攻撃」の予備的誇示がある。つぎに動物が実際の肉体的攻撃をしている場合でさえも、その行動はかぎられたものである。雄のシカどうしの出会いでは、何度も角を打ち合わせるが、もし一頭がやめて横腹を相手に向けると、相手はその傷つきやすい部分を攻撃することなく、その敵対者がもう一度頭を向けるのを待っている。<sup>(13)</sup>こうして種内攻撃では衝突を停止させるために、ある種の儀式の発達が見られる。一定の従属的な身振りがある。食肉獣を含めた多くの動物が、攻撃で負かされたときに背中を見せる。これで攻撃と従属の反応は、最大限に区別できるわけである。同種内の攻撃では多くの場合、相手の動物を殺してしまうまでには至らない。

無差別の攻撃行動は、逃げることのできないような状況で生ずる防御反応が攻撃に転ずるもの、子を保護している多くの雌の動物の防御行動のように、どんな種であろうと、巢に近づいたり、子にかまったりするものに対してむけ

られるもの、痛みによって引き起こされるものなどがふくまれる。

さて親和行動の一部は攻撃行動との関連で認識される。同種のメンバーに対する攻撃反応が強力なものである場合、ある種の攻撃の抑制や屈折が、動物間での接触を許すために必要となり、それによってつがいの形成や子どもたちと適切なかかわりをもつこともできる。このことが、親和と見なされる特殊な型の社会的な信号法を必然的に発達させた<sup>(14)</sup>とされる。

しかし親和行動はそれ自体として発達した部分もある。攻撃行動を屈折し抑圧する効果をもつ誇示行動は、なだめ信号とよばれ、交尾、養育、あるいは摂餌の行動から発達してきたとされる<sup>(15)</sup>。

ヒトの攻撃行動には他の動物の場合よりも手段としての攻撃行動の多様な展開がある。これは攻撃の直接の結果である傷害や苦痛とは関係のない報酬を得るためのものである。軍隊内で常用された上級者の下級者に対するリンチは奉仕を調達するためであったり、ときにはまわりの者に自己の権威を示すためであったりする。ヒトにおける反応的な攻撃のうち家庭内の口論からの情動的反応、長い欲求不満や屈辱に対する爆発的な反応の類は「敵意の攻撃」と名づけられている<sup>(16)</sup>。ヒトの攻撃行動は他の動物と同列に並べられない文化的要素を多様にふくんでいる。

ヒトが同種間で演ずる残虐行為や暴行はときに野獸的とよばれるが、しかし実際はこれは野獸の行動とあまり関係がない。とくに人間がときに行なう同種間の大虐殺や暴行は他の動物間には見られない、人間特有の理由に由来するが、まだその理由は解明されていない。

ヒトの攻撃行動は、他の動物の場合のように種間・種内・無差別に三分類することは適切でない。口論、喧嘩、闘い、襲撃、戦争など定義上では種内攻撃であるが、他の動物のそれとはきわめて態様を異にする。ヒトの食習慣は他の霊長類と異なり、大幅に肉食であるが、そのことからヒトの種内攻撃は他の動物の種間攻撃、つまり捕食行動に

その根源をもっていることが暗示されている。<sup>(17)</sup> 戦争や大虐殺のようなヒトの種内攻撃はきわめて残酷な形態におちいるのはここに原因があるかも知れない。ヒト属は進化系統上近縁種をもたない。ヒト属にもっとも近いとされるオナシザルでも、両者の共通の祖先種はきわめて遠い年代にさかのぼる。ヒト属はその激しい種内攻撃が近縁種を絶滅させたのであろうか。<sup>(18)</sup>

なわばりと順位 攻撃行動に隣接する行動として、なわばりと順位の行動がある。

なわばりは動物が同種の他のメンバーの接近を侵略として排除するような防御地域のことである。動物が他のメンバーの接近に堪えられなくなるのは、かれが密接に接触しようとする仲間を選択する結果である。動物たちがなわばりをもつようになると、威嚇や攻撃によって侵略者を排除するようになる。しかしこの防御行動は多分に儀礼的である。ある「社交儀礼」がなわばりに入ってくる侵略者を過ぎ去らせるのである。多くの場合、動物間のへだたりは、防御行動によってではなく、かれら相互に「ひっこんでいる」消極的態度によって保たれている。<sup>(19)</sup> なわばり行動は集団的に行なわれる場合もある。動物の中にはなわばり性を特殊な活動に限定しているものがある。つがいや営巣のときはそれを示すが、えさ探しには群をなして行く、といった方式である。

なわばり行動の機能は多様に考えられている。第一はなわばりの機能は種個体群の大きさの調節にかかわることである。なわばり行動は結果として動物群が食物を得る地域、繁殖地として用いる地域の中でかれらをへだてておくこととなるからである。動物群は食物その他の資源がその数にくらべて欠乏すると絶滅の危機におちいる。動物群は資源の量に対して個体数を調節する内部機構を備えている。その一つがなわばり行動である。第二になわばりが生殖過程のために維持されているとき、なわばりは配偶の際に同調した過程を他の動物の妨害なしに、進行させてゆく物理的に規定された支えであることである。第三にそれは性的淘汰をひき起こすことである。配偶のときに起こる闘争に



よって保たれた排他的な過程は鬭争の強者による性的淘汰を結果するであろう。またなわばりの設定は単に戦闘力によって保たれるのではなく、適当に逃避することによってより抵抗のないところになわばりを見出すことによっても可能である。鬭争と逃避の適当なバランスを考えた雄が営巢のなわばりをつくることによって雌をむかえ入れることができる。<sup>(20)</sup>この場合は適応性のあるものによる性的淘汰となる。第四になわばりが食糧採取にまで及んでいる場合は、その機能は資源保護にあると考えられる。さらに最後にそれは、食物をめぐるしばしば起こりうる争いを、なわばりの設定によって争いをカットする経済的代案を提供することであろう。

順位はなわばりの内部での個体間の優劣関係を規定する。順位は厳密に言えば、動物たちが同じ地域を占めているとき、場所とは別の理由によってかれらの相互作用の結末を調整している状況<sup>(21)</sup>をさしている。動物群の密度が増大すると、なわばり的な排他性より、個体間の順位制の方がより重要になってくるといわれる。<sup>(22)</sup>順位制も行動のある領域、たとえば摂餌のときには優先順位があっても、他の活動のときにはないことがある。

#### 〈暗黙の思考〉

ネズミを数個のT字型の道路分岐をもった迷路におくと、かれは何回もの試行錯誤ののち、一つ一つの道路分岐で正確な選択を行ない、迷路をとおりぬけるようになる。ネズミはT字型の分岐点で一つを正しいとし、他の二つを誤りと判断する。そうして道筋を正しく理解する。こうして高等動物は学習することができ、観念をもち、判断する。このような動物の思考は言語表現を欠いているので、暗黙の思考 (Unbenanntes Denken) と名づけられる。<sup>(23)</sup>人間も暗黙の思考をもっている。人が言葉にする素材を頭の中にもっているとき、人もやはり部分的に暗黙の思考をしている。言葉を習得していない幼児は暗黙の思考にもとづいて適確な行動をしている。また言葉は人の頭の中にある素材をしばしば完全に表現するのに失敗する。行動は暗黙の思考にのっているが、言葉はそれを不完全に表現し、また

相手はそれを不完全にうけとる。動物はまた暗黙の計数も行なう。ここにも暗黙の思考を認識することができる。

しかし人間だけが言葉をもっている。人間は動物と共有している暗黙の思考のいろいろなエレメントに、言葉を与えた。言葉は人間をすべての動物よりはるかに高いところへ持ち上げた。というのは、今や、暗黙の思考と言葉を持つ思考の間に恒常的な転換、両者のたえまないやりとりが始まり、その際、たった一つの卓抜した新しい言葉が、その枠をまさに爆発的にひろげるからである。彼自らを意識すること、自己の衝動の支配、責任、義務と意志の自由、道徳、宗教、技術、そしてはるか最後に科学が、この話すことのできる存在つまり人間だけの持つ特権として出現してくる。しかし常に至るところに暗黙の思考は並存しており、しかもそれは本質の層を、より深くいや最も深く想起することができる。一義的であり、しかるべき位置におかれたときに限ってその役に立つ言葉より、われわれの心のほうがずっとわれわれを助けてくれることも多いのである。<sup>(24)</sup>

暗黙の思考と言葉の思考とのかかわりの点でわれわれはヒトと他の動物との共通性と相違性との決定的な溝をみるのである。

- (1) P. V. Sommers : *The Biology of Behaviour*, 1972. 岡島昭・江口英輔訳「行動生物学」一九七五年、四一五頁。
- (2) 同上書三五頁。
- (3) 註(1)参照。
- (4) 同上書三六頁。
- (5) ほかに身体の内部の感覚がある。
- (6) イギリスで一時 *let's touch* 運動が行なわれた。これは現代社会ではとかく人間関係が疎遠になるので、それを改めてよきコミュニティの形成を意図したものであった。日本でも高校野球戦の監督が選手の肩をだくようにさわってバッター・ボックスに送る光景が見られる。選手に安心感を与えるという。

- (7) 同上書二五頁。山形・酒田の旧家本間家では嫁は新出来の家から迎えるという。経験知から遺伝の原理に則した方法である。
- (8) 同上書一四一頁。
- (9) 同上書一四二頁。
- (10) 同上書一四八頁。
- (11) 「徒党化」ともいわれる。鳥の場合に多く見られ、タカやヘビなど天敵に対して向けられる。「群れ反応」はヒト以外の霊長類にも見られる。同上書一五五頁。
- (12) 同上。
- (13) 同上書一五六頁。
- (14) 同上書一五〇頁。
- (15) 同上書一五一頁。
- (16) 同上書一七四頁。
- (17) 同上書一七七頁。
- (18) 香原志勢著「人類生物学」一九七五年、二一九頁。
- (19) 「行動生物学」一八三頁。
- (20) Mensch und Tier, 1968, 奥井一満・柴崎篤洋訳「ヒトと動物」一九七五年、N・ティンバーゲン「動物界における闘争と威嚇」一五頁。
- (21) 「行動生物学」一八六頁。
- (22) 同上。
- (23) 「ヒトと動物」オットー・ケーラー「暗黙の思考」一五〇頁。
- (24) 同上書一五七頁。

(未 完)